

「青少年の社会参加促進の方策について」（提言書）

平成26年 3月

富士市社会教育委員会議



平成26年 3月 4日

富士市教育長 山田 幸男 様

富士市社会教育委員会  
委員長 金刺 靖雄

提言書の提出について

今期富士市社会教育委員会議において「青少年の社会参加促進の方策について」を研究し提言書を取りまとめたのでこれを提出します。



## 目 次

【はじめに】	1
1 課題研究への取り組み	2
(1) 用語の定義	2
(2) 研究の進め方	3
2 本市の青少年の社会参加の場とその効果	3
3 青少年の社会参加を阻害するもの	3
(1) 社会環境の変化	4
(2) 世代ごとの特徴と社会参加を阻害しているもの	4
①小学校入学前～小学生世代	4
②中学生～高校生世代	5
③大学生世代～30歳代	6
4 青少年の社会参加を促進するための具体的な方策	7
(1) 青少年体験交流事業総合情報検索ポータルサイト「(仮称) ふじの元気」の設置	7
(2) 社会貢献活動促進事業「(仮称) ふじの絆」の創設	7
(3) 青少年の居場所「(仮称) ふらっとカフェ Fuji」の設置	8
(4) その他、既存の事業や施設等を活用した青少年の社会参加の促進	8
【おわりに】	10
【巻末資料】	12
【資料1】子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書 [概要] (H22. 10. 14)	13
【資料2】青少年の体験活動等と自立に関する実態調査 平成22年度調査報告書[概要] (H23. 11. 7)	15
【資料3-1】本市における青少年の社会参加の場とその効果	17
【資料3-2】発達段階に応じた青少年の社会参加の場	18
【資料4-1～4-3】青少年の社会参加を阻害するものと解決策の方向性	19～21
【議論経過】	22
【社会教育委員名簿】	24

## 【はじめに】

社会環境や経済状況等がめまぐるしく変化する中、将来に亘って活力ある地域社会を構築するためには、一人でも多くの地域住民が、主体的に地域活動に参加することが求められています。

特に、将来の地域社会の担い手となる若い世代の活動への参加が期待されていますが、多くは、地域活動に興味・関心がない、仕事や家庭が忙しい、参加したい気持ちはあるが、どのように参加したらいいのかわからないなどの理由により、地域活動から離れ、良好な地域社会の維持・継続が難しい状況となっています。

一方、2011年3月11日の東日本大震災では、青少年を含む多くの人々が、自らの判断で積極的に被災地への支援活動に参加するなど、支え合い、助け合う意識は、人間本来の姿として、根強く残っていることが伺えます。

このような中であって、学校教育をはじめ、社会教育の分野では、青少年を対象としたスポーツや文化、自然体験、社会体験など様々な活動を通して、青少年の地域活動への参加を促がす施策を推進しています。

しかしながら、近年、少子化・核家族化に加えて、クラブ活動や塾、仕事や娯楽など、対象となる青少年自体が忙しい等の理由により、結果として、各団体で青少年の獲得競争を展開している様相も感じられます。

このような状況を踏まえ、今期の富士市社会教育委員会議では、「青少年の社会参加を促進するための方策について」調査研究を行うこととしました。

本提言では、青少年の社会参加を促すためにどのような取り組みが有効なのか、青少年期での体験活動が、成人期の考え方や行動に良い影響を与えると考えられていることから、この点にも着目しながら調査研究を行いました。

本来、青少年の社会参加促進のためには、多様な分野で、多様な施策を複合的、継続的に取り組むべきではありますが、より現実的で具体的な方策を提言することを優先し、社会教育事業を中心として取り組める内容としています。

本提言内容を、教育委員会が中心となって推進していただければ幸いです。

## 青少年の社会参加促進の方策について

### 1 課題研究への取り組み

#### (1) 用語の定義

今期の研究課題「青少年の社会参加促進の方策について」に取り組むにあたり、対象と目的を明確にするため、最初に「青少年」と「社会参加」の2つの用語の定義を行いました。

「青少年」：小学校入学前から概ね30歳代の者

「社会参加」：地域活動等を中心とする社会貢献活動に参加すること。

ただし、小学生から大学生世代においては各種体験活動を含む。

「青少年」とは、一般的に、子どもから若者までの若い世代を想像させる言葉です。広辞苑では、「青年と少年。こどもとおとなの中間の若い人たち」とされています。また、国や県の法令等で「青少年」を年齢で定めている場合もありますが、18歳未満とされています。

しかし、私たちが地域活動等への参加を期待する年齢層は、もう少し上の世代も含まれています。

平成21年7月に制定された「子ども・若者育成支援推進法（平成22年4月施行）」に基づき国が策定した「子ども・若者ビジョン」や県の「“ふじのくに”子ども・若者プラン」では「子ども・若者」を「小学校入学前から概ね30歳代の者」と定めています。

このため、私たちも「青少年」を「小学校入学前から概ね30歳代の者」とし、幅広い年齢層を対象に研究することにしました。

「社会参加」とは、広義では、仕事やボランティアなど、営利・非営利に関わらず、人々が共同で社会生活を営むための活動に参加することです。

しかし、ここでは、より具体的な施策を提言するために「地域活動等を中心とする社会貢献活動に参加すること」と定義をしました。

ただし、子どもの頃の、自然体験、生活体験、社会体験などの様々な体験は、その後の人生に好影響を及ぼすことが公的機関の調査により報告（※1）され、大人になってから地域活動等に積極的に参加することが期待されることから、「小学生から大学生世代においては各種体験活動を含む」ことにしました。

※1 独立行政法人国立青少年教育振興機構は、子どもの体験活動の実態に関する調査研究を行い、『子どもの頃の「自然体験」や「友達との遊び」、「地域活動」等の体験が豊富な人ほど「経験したことの無いことには何でもチャレンジしてみたい」といった意欲・関心や、「電車やバスに乗ったときにお年寄りや体の不自由な人に席をゆずろうと思う」といった規範意識、「友達に相談されることが良くある」といった人間関係能力が高い。』といった報告を行ない、青少年期における体験活動の重要性に言及している。

【巻末資料：資料1】「子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書【概要】（H22.10.14）」

【巻末資料：資料2】「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査 平成22年度調査報告書【概要】」

（H23.11.7）

## (2) 研究の進め方

研究を進めるにあたり、青少年を「小学校入学前～小学生」、「中学生～高校生」、「大学生～青年（30歳代）」という3つの世代に区分し、私たち委員が区分ごとに分かれて効率的に議論をすすめました。

議論は、最初に、本市における青少年の社会参加の場には、どのようなものがあり、それぞれの場が青少年に与える効果について整理しました。

次に、青少年の社会参加を阻害している原因、理想の姿を実現するための解決策の方向性について、順に議論を深めました。

最終的に、社会教育事業として実施可能な4つの方策を提言としてまとめました。

## 2 本市の青少年の社会参加の場とその効果

学校教育の場でも自然体験、生活体験、社会体験などの体験事業は行っていますが、社会教育の場においても、本市には青少年のための多様な社会参加の場があります。

町内会（区）や生涯学習推進会等は、長年にわたり防犯、防災、福祉、体育祭、文化祭、お祭りなどの各種事業を実施しています。

また、体育協会や文化連盟、子ども会やボーイスカウト・ガールスカウト等の団体も長い歴史と伝統に基づく活動を行っています。

近年では、「ゆめ・まち・ねっと」、「サイエンス・プロジェクト」、「コミュニティースペーススリぼん」、「富士川っ子の会」、「青少年指導者の会ふじまる」などの市民団体が、活動目的と内容に若干の相違はありますが、青少年の健やかな成長を願って、それぞれ独自の歩みを進めています。

さらに、市のまちづくりセンターや青少年センターで行っている各種講座も青少年の社会参加の場として考えることができます。

このほか、保健、福祉、環境などの多様な分野で青少年の社会参加の機会を設けており、市はもちろん、国や県、その他の公共的団体の事業や民間企業等の社会貢献活動なども含めると、青少年にとって非常に多くの社会参加の場があることがわかります。

これらのすべての活動は、市民一人ひとりが豊かで幸せな生活を送るために、地域の社会的課題に取り組もうとする試みであり、活動団体の多くは青少年の参加を望んでいます。

そして、これらの活動は、参加する側、主催する側の立場に関係なく、活動からの直接的な学びを得ることはもちろん、人と触れ合い、仲間を作るとともに、自己肯定感や協調性を培うなどの効果が期待でき、円滑な社会生活を営むうえで非常に重要な体験学習の場となっています。

【巻末資料：資料3-1】「本市における青少年の社会参加の場とその効果」

【巻末資料：資料3-2】「発達段階に応じた青少年の社会参加の場」

## 3 青少年の社会参加を阻害するもの

前述のように、本市には青少年のための多種多様な活動の場が用意されています。

しかし、活動団体等からは「参加者がいない」、「担い手がいない」などの声をよく聞



きます。青少年健全育成に携わっている私たちも、そのことを実感しています。

実際、地域社会で活動している各種団体における青少年の組織率が徐々に低下しているなど、このまま“時代の流れ”と看過できない状況にあります。

では、何故、青少年の社会参加が促進されないのでしょうか。

【巻末資料：資料4-1～4-3】「青少年の社会参加を阻害するものと解決策の方向性」

## (1) 社会環境の変化

少子化や核家族化、長引く経済不況等による雇用環境の変化、急速な情報化の進展など、私たちの社会生活を取り巻く環境は、絶えず変化しています。

私たちは、これらの環境の変化に懸命に対応してきました。その結果、「便利さ」、「豊かさ」、「個人の尊重」など多くの良い面を手に入れてきた一方で、「効率化」、「成果主義」、「価値観の多様化」、「個人情報保護」など、取り組まなくてはならない新たな課題も生まれてきました。

これらの新たな課題の多くは、複雑化・難解化しながら青少年の社会参加を阻む背景となっていると思われます。基礎自治体である市や生活者としての私たちが直接解決できないことばかりのように思えます。

このような中であっても、私たちが青少年の社会参加を促進するために取り組めることは必ずあるはずです。それが何かを明らかにするため、世代ごとの青少年の特徴を踏まえたうえで、青少年を取り巻く社会環境と社会参加を阻害する要因について、次のように整理しました。

## (2) 世代ごとの特徴と社会参加を阻害しているもの

### ① 小学校入学前～小学生世代

この世代は、一般的に「子ども」と呼ばれ、人々から最も愛されている世代です。

子どもは、家庭において親や保護者など（以下、「親等」という。）から多くの愛情を注がれ、今後の成長の土台となる「自己肯定感」を育むとともに「人への興味・関心」や「基礎的な生活習慣」を身につけます。

この世代の基本的な生活習慣や考え方の殆どは、親等から大きく影響を受けるので、親等が子育てに関する正しい知識・情報等を身につけることは非常に重要となります。

また、この世代は、同世代、異世代と過ごすことで、社会生活に必要な基礎的な能力を培う時期でもあります。

特に、友達との遊びは、「創造力」や「表現力」、「主体性」や「協調性」など、将来の社会生活に必要な能力を身につける貴重な機会だと考えられます。

今、社会環境の変化を背景として、子どもの遊ぶ機会が減少しています。

遊びには様々なものがあります。外遊び、屋内遊び、一人遊び、集団遊び、どれもが貴重な成長の機会となると考えられます。中でも外遊びは、多人数で遊べること、体力と知力を最大限に使うことが出来る点で、この世代にとって最も大切な成長の機会だと考えられます。

外遊びでは、走ったり転んだり、どうすればもっと楽しくなるか、行って良いこと・悪いこと、新しいルールを創造したり、仲間と話をしたり、助けあったりする行動が自然と行われます。さらに、態度や様子、顔色や声の調子から、他者の感情の変化を感じることができます。そのような実体験の機会が減少していることは非常に大きな問題だといえるでしょう。

それでは、なぜ遊びの機会が減少しているのでしょうか。

一つには、親等が「仕事などが忙しくて子どもに目が届かない」、「遊びの最中に何が起こるかわからない」、「遊びの必要性を感じない」、「他者との関わりが煩わしい」など、子どもの安全に対する不安、他者との関わりを疎む意識があることも原因になっていると思われます。

もう一つ、情報技術の進展とともに多様な情報通信機器やゲーム機器が登場していることが考えられます。

本来、遊びは「楽しみたい」、「勝ちたい」など、ワクワク感やドキドキ感が動機付けとなっているものがほとんどです。ゲームの中の仮想世界では、同様な動機付けがなされているだけでなく、最近では、一人でいながら、友人や見知らぬ人と一緒に楽しむことができるなど、現実にも人と接しなくても、人を身近に感じ、ゲームを通じてですが、相手を理解する体験を得ることができてしまいます。

しかしながら、仮想世界の遊びは、外遊びに代表されるような現実世界の遊びとは違います。現実世界の遊び、特に外遊びの重要性を一人でも多くの親等が理解するとともに、子どもが安全に、安心して遊ぶことができる場の確保、多種多様な社会参加の場について、わかりやすい情報を提供することが解決の糸口になってくると考えられます。

## ②中学生～高校生世代

この世代は、大人に成長する一歩手前の多感な時期で、一般的に思春期と呼ばれている世代です。特徴としては、前世代（小学生以下）に比べて友人や仲間をとて大切にすることがあげられます。

自我の目覚めとともに、「親等とのつながり」から、徐々に「仲間とのつながり」を重視し、自分の将来や可能性に疑問や不安を持ち、何が大切なのか、何が正しいのかなど、時には悩み、時には自己の存在意義を模索するなど、心と身体の分化と収束を繰り返しながら成長していきます。

しかし、仲間を大切に思う反面、それ以外の者を非難したり、「いじめ」をしたりすることもあります。「いじめ」の殆どは加害者・被害者双方に長く大きな傷跡を残す悲しい行為ですが、最近では、周囲からは解かりにくいネット世界の中で執拗に「誹謗・中傷」を繰り返すなど、陰湿化した「いじめ」が増加し、長期化した場合、被害者は心も体も疲れ果て最悪の事態に陥るケースもあります。

また、この世代では、仲間と過ごす時間が多くなるだけでなく、勉強や部活動などが急激に忙しくなります。このため、地域の体育祭や各種行事に進んで参加する者は少なく、時には、参加を促すために図書券などの金品を配布するところも見受けられ

ます。

「まずは参加してもらおう」ために「止むを得ない」との事情も多分に理解できますが、社会教育上の観点からは理想的とは言い難い状況です。

繰り返しになりますが、この世代は、親等以外の仲間と一緒に過ごしながらか自己を形成し、将来の社会生活に必要な多くの学びを得ます。

そのため、彼らの成長には、仲間と出会う場所や一緒に安心して過ごすことのできる場所がとても大切になってきます。とりわけ、学校等で居場所を失っていたり、今の居場所で無理を強いられていたりする場合は、別の居場所が必要になってきます。

また、この世代の多くの親等も、子どもへの接し方がわからない、子どもが何をしているか、何を考えているかわからないなどの悩みを抱えています。親等に対して、子どもへの接し方はもちろん、子育ての不安や悩みについて相談できる場所や中学生・高校生の社会参加に関する情報提供を行うことも重要となってくるでしょう。

### ③大学生世代～30歳代

この世代は、一般的には「大人」と呼ばれる世代です。「青年」と呼んでも良いでしょう。高校卒業後に社会にでる者、大学や専門学校に進学する者など、進路の違いはありますが、それ以降は、総じて、自立した生活、社会の構成員として働くことを求められている世代です。

この世代の社会参加を阻害する要因を考えるためには、まず、彼らを取り巻く社会・経済環境について正しい認識を持つ必要があります。

近年の日本社会では、あらゆる面で効率化を重視する傾向があります。効率化は悪いことではありませんが、度が過ぎると人間性を無視してしまう面もあります。

さらに、経済はグローバル化等に伴い不透明・不安定感が増えています。経済不安は雇用環境の悪化を招き、リストラ、非正規雇用の増加、新卒採用者の削減などが社会問題化しています。「頑張れば報われる」、「努力すれば結果が出る」時代を過ごした彼らの親世代とは大きく違ってきています。

この環境の変化を無視して、安易にこの世代を「安定志向」、「主体性がない」などと批判しては、彼らの社会参加を促すことは難しいでしょう。

そのうえ、社会人としての経験が浅く、仕事で学ぶべきことや覚えるべきことは山のようにあり、結婚・出産などの重要なライフイベントの多くは、この世代に集中していることも社会参加を阻害している要因となっていると思われます。

また、前々世代、前世代の体験や過ごし方により、社会参加への意識が大きく異なることも分かっています。ジュニアリーダーなどの子ども会活動、ボーイスカウトやガールスカウトなどの活動を、前々世代、前世代で経験したことのある者の方が、そうでない者より社会参加意識が高いなどのデータもあります。

では、小さいころの体験が少ない者に対して、この世代から社会参加意識を育てることは本当に難しいのでしょうか。

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、多くの青年が自らの判断で積極的に被災地への支援活動に参加するなど、支え合い、助け合う意識は、人間本来の

姿として、根強く残っていることが伺えます。

また、本市においても、青少年の船などに初めて参加した若い指導者が、社会参加の意義や楽しさに気づき、子どもの遊びに関わる活動に取り組んだりする事例や、青少年センターの教養講座を受講している青年が、放課後児童クラブや老人ホームでボランティア活動を行ったりする事例が見られ始めました。

社会参加が自己成長の場であり、将来の自分に役立つ貴重な体験になることを認識してもらい、活動に関する情報を正しく伝えることができれば、この世代からでも、きっと社会参加をする青年が現われてくるはずです。

#### 4 青少年の社会参加を促進するための具体的な方策

これまで、青少年の社会参加の場と効果、青少年を取り巻く環境の変化や世代ごとの特徴、そして社会参加を促すための解決策の方向性について述べてきました。

これらの議論を経て、私たちは青少年の社会参加を促すための具体的な取り組みについて、以下の4つの方策を提案します。

##### (1) 青少年体験交流事業総合情報検索ポータルサイト「(仮称) ふじの元気」の設置

これまでの議論で、すべての世代や親等に共通する事項として、社会参加に関する正確な情報の提供が必要不可欠なことがわかりました。そこで、市のウェブサイトを利用して、市内の青少年が参加できる事業や団体を紹介できるポータルサイト「(仮称) ふじの元気」の設置を提案します。

社会参加活動を、分野別（文化、スポーツ、自然体験など）、世代別（入学前、小学生、中学生、高校生など）、地区別（活動場所、団体所在地など）に整理して、活動内容はもちろん、活動理念や目的についても分かりやすく整理して伝えます。

もちろん、行政だけでなく民間の事業も紹介します。詳細案内については、団体のホームページにリンクを貼るなどしても良いでしょう。

多くの青少年が社会参加をし、富士市全体に活力が漲（みなぎ）ることを願って「(仮称) ふじの元気」と命名しました。

この提案を実現するためには、ポータルサイト構築のための費用、行政や民間事業の情報収集と整理に要する時間と労力も課題となります。

また、情報提供後は、事業を実施する行政や民間団体の側も、相手にわかりやすく伝えるための工夫をするとともに、ウェブサイトの内容を絶えず更新し、最新の状態にしておく必要があります。

さらに、民間の事業については営利事業の宣伝にならないように一定の審査も必要となるでしょう。

##### (2) 社会貢献活動促進事業「(仮称) ふじの絆」の創設

ボランティアをしたい人、必要な人を登録しマッチングする仕組み『社会貢献活動促進事業「(仮称) ふじの絆」』の創設を提案します。

この事業は、主に大学生世代以上を対象にします。事業に関する情報の提供は、市の

ウェブサイトを利用しても良いでしょう。

人と人との「絆」を最も大切にする事業として「(仮称) ふじの絆」と命名しました。

事業を実施するうえで最も大切なことは、お互いの求める人材をしっかりとマッチングさせることです。ミスマッチは事業自体の信頼性を失うことになり、ミスマッチによって起こるトラブルを考えると、事前に登録希望者とできる限り面接を行うなど、当事者が求める人材をしっかりと把握することが必要です。

確かなマッチングを行うためにも、この役割を担うコーディネーター役はとても重要です。このため、コーディネーターの担い手は、資格のある専門の職員を配置するなどの対応が望ましいと思われます。

さらに、市内の市民団体や民間事業者、社会福祉協議会のボランティアセンターと連携・協力体制も構築できれば、より効果的な事業展開が期待できます。

また、青少年センターの利用者が、現在、ボランティア活動に取り組んでいます。青少年センターに一人でも多くの青少年を集めるため、多様な教養講座を企画するとともに、彼らのボランティア活動を積極的に支援すれば、青少年センターの若い世代がこの事業の推進役となってくれるはずです。

今後、新しい社会貢献分野として、社会生活を営むうえで困難や生きづらさを抱えている人達を支える活動に取り組む視点も重要となってくるでしょう。

### (3) 青少年の居場所「(仮称) ぷらっとカフェFuji」の設置

青少年にとって親しい仲間と語りあったり、新しい仲間と出会ったりする場はとても大切です。このような青少年の居場所として「(仮称) ぷらっとカフェFuji」の設置を提案します。

気軽に一人でも多くの青少年が集まり、くつろげる場所をイメージして「(仮称) ぷらっとカフェFuji」と命名しました。

「(仮称) ぷらっとカフェFuji」では、飲食が自由です。青少年がくつろげるようなインテリアや設備を備えています。許す限り夜遅く、できれば22時くらいまで開設します。青少年が自分の活動などをPRできるような場としても活用します。

この事業の最も大きな課題は、施設の確保と利用方法です。(仮称)教育複合施設内への確保や既存の施設を活用するなど施設確保に係る経費を抑える必要があります。

また、一般的に市の施設では、開設時間や利用方法等が制約されますが、「(仮称) ぷらっとカフェFuji」が、真の青少年の居場所となるためには、その点においては大胆な緩和が求められるかも知れません。

### (4) その他、既存の事業や施設等を活用した青少年の社会参加の促進

青少年の社会参加は、既存の事業や施設等を利用することで促進できると思われます。

例えば、「かけこみ110番の家」に参加、協力していただいている家に、曜日や時間を決めて子どもたちが訪れ、家の方々と触れ合う機会を設けるなどの仕組みを作れば、「いざ」という時に駆け込みやすくなりますし、地域の大人と顔見知りになり、話をする生活体験の機会ともなります。

また、小学生の下校時に見守りボランティアとして協力してくれている方に「あいさつ・声かけ運動」の推進役をお願いすることも良いでしょう。

他に、社会教育課の「放課後子ども教室事業」やまちづくりセンターの「少年教育事業」で、見守り役や指導的立場に中・高校生以上の青少年の参加と協力を得ることが出来れば、一層素晴らしい事業になることでしょう。

既存の施設利用の例としては、まちづくりセンターなどの公共施設を、さらに青少年が利用しやすくなるように青少年の目線に立って、利用方法や利用時間などを工夫することができれば、青少年の社会参加を促進する可能性があります。

以上、青少年の社会参加を促進する方策について、4つの提案をさせていただきました。それぞれの提案に課題はありますが、すべての提案が実現性の高い内容となっていると思っています。実現に向けてご検討くださいますようお願いいたします。

## 【おわりに】

今期の研究課題『青少年の社会参加促進の方策について』は、昨期同様に非常に難しいテーマでしたが、最終的に4つの提案にまとめることができました。

私たちを取り巻く生活環境は依然として厳しく、とりわけ青少年とその親世代にとっては、厳しい状況が長く続いている中で、本当に社会参加を促進する方策が提案できるのか不安もありました。

いつの時代も、人は社会の構成員として何かしらの役割を果たすことが義務付けられています。私たちを取り巻く環境がどんなに厳しくても、積極的に社会参加する人がいなくては良好な市民生活を維持できないからです。

この提言書は、そのような考え方のもと、変えることのできない環境は受け入れ、そのうえで私たちに何が出来るのかについて議論してきた内容をまとめたものです。

青少年は未来を創る宝物です。青少年教育は社会教育事業の本質ともいわれております。

提案した内容には課題も多くあると思いますが、ぜひ事業化に向けて前向きに御検討していただくことを希望いたします。

最後に、この提言書の作成にあたって御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げるとともに、今後も引き続き本市の社会教育事業への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。結びの言葉といたします。





# 卷末資料

【資料 1】 子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書 [概要]

(H22. 10. 14)・・・ P13

【資料 2】 青少年の体験活動等と自立に関する実態調査

平成 22 年度調査報告書[概要] (H23. 11. 7) …… P15

【資料 3-1】 本市における青少年の社会参加の場とその効果 …… P17

【資料 3-2】 発達段階に応じた青少年の社会参加の場 …………… P18

【資料 4-1～4-3】

青少年の社会参加を阻害するものと解決策の方向性 …… P19～P21

# 「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書〔概要〕

## —子どもの頃の体験は、その後の人生に影響する—

平成 22 年 10 月 14 日

## 〔要旨〕

国立青少年教育振興機構では、幼児期から義務教育修了までの各年齢期における多様な体験（以下、「子どもの頃の体験」という）とそれを通じて得られる資質・能力（以下、「体験の力」という）の関係性を把握し、学校や地域、家庭において、どの年齢期にどういった体験が重要になるのかを明らかにするため、青少年の発達段階に応じた適切かつ効果的な体験活動の推進に関する調査研究を実施した。

調査研究にあたり、子どもの頃の体験（自然体験、動植物とのかかわり、友だちとの遊び、地域活動、家族行事、家事手伝い）と体験の力（自尊感情、共生感、意欲・関心、規範意識、人間関係能力、職業意識、文化的作法・教養）についてそれぞれ調査項目を作成し、成人（20代～40代）対象のウェブ調査と、青少年（小学5年生・6年生、中学2年生、高校2年生）対象の質問紙調査により、それぞれ得られた回答を得点化して、子どもの頃の体験と「体験の力」の関係性をみた。

## ＜主な調査結果（成人調査）＞

**結果①** 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多い。

■子どもの頃の「自然体験」や「友だちとの遊び」、「地域活動」等の体験が豊富な人ほど、「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」や、「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」、「友だちに相談されることがよくある」といった「人間関係能力」が高い（p.1）。

■子どもの頃の体験が豊富な人ほど、最終学歴が「大学や大学院」と回答した割合が高く、その他、現在の年収が高かったり、1ヶ月に読む本の冊数が多くなる、結婚している、子どもの数が多い、という割合が高い傾向がみられる（p.2-3）。

**結果②** 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、

「丁寧な言葉を使うことができる」といった、日本文化としての作法・教養が高い。

■子どもの頃の体験が豊富な人ほど、「丁寧な言葉を使うことができる」といった「文化的作法・教養」が高い。そして、「文化的作法・教養」5項目は、体験の6つのカテゴリ※すべて幅広く関係している（p.4）。

※体験のカテゴリ：「自然体験」・「動植物とのかかわり」・「友だちとの遊び」・「地域活動」・「家族行事」・「家事手伝い」

**結果③** 小学校低学年までは友だちや動植物とのかかわり、

小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

■各年齢期において「体験の力」とより関係している体験は以下のとおりである（p.5）。

- ・小学校低学年までは「友だちとの遊び」や「動植物とのかかわり」等
- ・小学校高学年から中学校までは「地域活動」や「家事手伝い」、「家族行事」、「自然体験」等

**結果④** 年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友だちとの遊びが減ってきている。

■「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」といった「自然体験」、「すもうやおしくらまんじゅうをしたこと」といった「友だちとの遊び」が若い世代ほど少ない。一方、幼少期での「家族の誕生日を祝ったこと」といった「家族行事」は若い世代ほど増えている（p.6）。

■「規範意識」、「人間関係能力」、「職業意識」、「文化的作法・教養」等の「体験の力」は、世代が上がるほど高まる（p.7）。



## <主な調査結果（青少年調査）>

### **青少年調査結果①** 幼少期から中学生期までの体験が多い高校生ほど、 思いやり、やる気、人間関係能力等の資質・能力が高い。

- 幼少期から中学生期までに「動植物とのかかわり」、「地域活動」、「家事手伝い」等の体験が豊富な高校生ほど、「友だちがとても幸せな体験をしたことを知ったら、私までうれしくなる」といった「共生感」、「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」、「けんかをした友だちを仲直りさせることができる」といった「人間関係能力」が高い(p.8)。

### **青少年調査結果②** 体験が豊富な子どもほど、 携帯電話を持っている・読む本の冊数が多い、という割合が高い。 また、コンピューターゲームやテレビゲーム遊びをしない、という割合が高い。

- 幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど、携帯電話を所持する割合が高く、1ヶ月に読む本の冊数が多くなる傾向がみられる(p.9-10)。
- 幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど、コンピューターゲームやテレビゲーム等のゲーム遊びの頻度が少ないという傾向がみられる(p.11)。

### **青少年調査結果③** 小学校低学年までは友達や動植物とのかかわり、 小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

- 高校2年生の結果から、各年齢期において「体験の力」とより関係している体験は以下のとおりである(p.12)。
  - ・小学校低学年までは「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」等
  - ・小学校高学年から中学校までは「地域活動」や「家事手伝い」、「家族行事」、「自然体験」等

# 「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」 平成 22 年度調査報告書〔概要〕

平成 23 年 11 月 7 日

国立青少年教育振興機構では、平成 18 年度から青少年の自然体験、生活体験・習慣の実態や自立に関する意識等について全国規模の調査を行なっている。平成 22 年度は、学年間の比較および平成 18～22 年度の経年変化を分析し、あわせて保護者の子どもの頃の体験活動とそれを通して得られる資質・能力やその子どもの体験活動との関係、さらに居住地と自然体験の関係について調査・分析を行った。

## <主な調査結果>

### 《青少年の体験活動や自立に関する意識の実態》

#### **結果① 体験を多く行っている青少年ほど、他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身についており、自己肯定感も高い傾向にある。**

■生活体験を最も多く行っている群における「困っている人がいたときに手助けする」の「とても当てはまる」の比率（52.1%）は、最も行っていない群における比率（7.6%）の 7 倍近くである（図 194）。

■自然体験を最も行っている群における「勉強は得意な方だ」の「とても思う」の比率（17.9%）は、最も行っていない群における比率（3.3%）の 5 倍以上である（図 220）。

#### **結果② 青少年の自然体験活動の実施率は、学年が上がるにつれて減少しており、またほとんどの活動に関して、ここ 5 年間で減少傾向にある。**

■「昆虫や水辺の生物を捕まえること」について、平成 22 年度に学校の授業や行事以外で「何度もした」の比率は小学校 1 年が 30.7%であるのに対し、高校 2 年は 4.3%と 20 ポイント以上低くなっている（図 6）。

■小学校 2 年および小学校 5 年の学校の授業や行事以外での「山登りやハイキング、オリエンテーリングやウォークラリー」は、平成 18 年度よりも平成 22 年度の比率のほうが 10 ポイント以上低くなっている（図 105）。

### 《保護者の子どもの頃の体験活動と現在の資質・能力の関係》

#### **結果③ 地域活動やボランティア活動などの子どもの頃の体験が多い保護者ほど、人間関係能力、文化的作法・教養等の資質・能力が高い。**

■「地域活動」、「家族行事」等の子どもの頃の体験が多い保護者ほど、「人間関係能力」、「文化的作法・教養」等の体験を通して得られる資質・能力が高い傾向にある（図 375、376）。

■子どもの頃の「ボランティア活動をしたこと」が多い保護者ほど、「人間関係能力」等の体験を通して得られる資質・能力が高い傾向にある（図 377）。また、「地域活動」等子どもの頃の体験が多い保護者ほど、「ボランティア活動をしようと思う」という現在の意識が高い傾向にある（図 378）。

裏面へつづく



National Institution For Youth Education  
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号  
http://www.niye.go.jp TEL03-6407-7745  
青少年教育研究センター / 総務企画部調査・広報課

《保護者の体験活動とその子どもの体験活動の関係》

**結果④** 子どもの頃に多くの体験を行ってきた保護者ほど、その子どもも体験を多く行う傾向にあり、また自己肯定感の高い保護者ほど、その子どもも自己肯定感が高い傾向にある。

■保護者の中学生期までの「海や川で泳いだこと」の体験高群における子どもの同体験「何度もある」の比率(63.0%)は、低群における比率(39.2%)より20ポイント以上高い(図224)。

■「自分のことが好きである」と思っている保護者ほど、その子どもが「今の自分が好きだ」に対し「とても思う」と回答する比率が高い(図387)。

**結果⑤** 保護者の自尊感情、人間関係能力等の資質・能力が高いほど、親子の関わりが多く、その子どもは積極性等の自立的行動習慣が身についている。

■「自尊感情」、「人間関係能力」、「文化的作法・教養」等の体験を通して得られる資質・能力が高い保護者ほど、その子どもが「お父さんやお母さんにほめられること」等お父さんやお母さんとの関わりについて「よくある」と回答する比率が高い(図382~384)。

■「自尊感情」、「人間関係能力」、「文化的作法・教養」等の体験を通して得られる資質・能力が高い保護者ほど、その子どもが「自分の思ったことをはっきり言う」、「困ったときでも前向きに取り組む」等の自立的行動習慣について「とても当てはまる」と回答する比率が高い(図379~381)。

《居住地と自然体験の関係》

**結果⑥** 保護者が子どもの頃に自然体験を行った頻度は、居住地の種類によって違いが見られるが、現在の青少年の自然体験については、居住地の種類による違いは殆ど見られない。

■保護者の中学生期までの「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」の体験高群の比率は、居住地「政令指定都市・特別区」では24.9%を占めるが、「村」ではそれよりも40ポイント以上高い66.4%を占める(図243)。

■保護者の中学生期までの「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」にあっても、居住行政区分別にみた「村」と「政令指定都市・特別区」の間で30ポイント以上の比率差がある(図237)。

■青少年の自然体験については、都市規模による体験の頻度の違いは殆ど見られない(図301、299)。

## 本市における青少年の社会参加の場とその効果

区分	社会参加(体験活動)の場	社会参加(体験活動)の効果
小学校入学前 小学生	地域の行事(祭など)	地域の大人、子どもがお互いに顔見知りの関係になる
		地域の子どもの成長を地域で見守ることができる
		大人の活動を見て子どもが育つ(対人関係、規範意識)
		地域の大人に褒められて、自立心、自尊意識が育つ
	文化・スポーツなど各種少年団活動	仲間作り、親子のふれあい、協調性、困難を乗り越える力
	子ども会活動	仲間作り、親子のふれあい、協調性、リーダーシップ
	ボーイスカウト・ガールスカウト活動	自然体験、規律、仲間作り
小学生	富士川っ子の会	様々な体験機会。目に見える形での達成感を得られる。(自立心の育成、参加意欲の向上)
	放課後子ども教室(吉永北:紙ヒコーキづくり)	体験機会が少ないため、紙を真直ぐに折れない。折れるようになることによる達成感を得る。(自立心の育成、意欲の向上)
	まちづくりセンターの少年教育事業	センターが核となり、子どものコミュニティが形成されている。大人との関わりの場となっている。 地域で育った子ども(小学生)が中学生や大学生になってボランティアとして戻ってきている。
中学生 高校生	地域の行事(祭など)	ふれあい、地域の大人、友人の親を知る機会となる。
	子ども会(ジュニアリーダー活動)	県下で最も盛んで多くの子どもが参加している。 リーダーシップ、責任感、協調性、仲間作り
	ボーイスカウト・ガールスカウト活動	自然体験、規律、仲間作り 高校生が夏のキャンプ体験を作文にし、県知事賞を受賞
	たらい流し祭り	川の清掃など環境美化体験
	スポーツ体験	困難を乗り越える力、協調性を培う。
	中学生と語る会	地域の大人と中学生の相互理解が深まる。
大学生 青年	親子で「ごみ収集車」のペイント作業	子どもの参加を促すことにより、若い父母世代(青年層)を社会活動に参加させることができる。
	大学生、青年層を対象とした防災教育	青年層が地区防災の担い手になる。
	子ども会活動(シニアリーダー活動)	指導者養成、リーダーシップ、責任感、仲間作り
	ボーイスカウト・ガールスカウト活動	指導者養成、リーダーシップ、責任感、仲間作り
	まちづくりセンター講座やまちづくりセンターで行われる各種行事	まちづくりセンターに慣れ親しんでもらうことにより、まちづくり活動への参加を促進する。
	青年層を対象とした託児ボランティア養成講座を開講した。	託児ボランティア養成講座の修了生がまちづくりセンターの家庭教育学級で託児ボランティアとして活躍している。
	小学生を対象とした講座に「富士市青少年指導者の会ふじまる」を活用した。	青年層の社会参加を促す。
	大学生が目指す職種の活動の紹介(例)保育学部生に託児ボランティアを依頼	大学生のキャリア教育を兼ねた社会参加
青少年センター講座	青年同士の交流、仲間作り、ボランティア活動体験	

発達段階に応じた青少年の社会参加の場

発達段階に応じた体験型青少年教育事業			
区分	高校生	中学生	小学生高学年
	修学旅行	修学旅行	修学旅行
	スポーツ・文化活動(学校の部活動・各種少年団活動など)		
	まちづくりセンター少年教育事業		
	子ども会活動		
	ジュニアリーダー養成事業	インリーダー養成事業	
	青少年センター講座	平石町少年交流事業	
	富士市青少年体験交流事業	みどりの学校	
	自然教室	ししどて学級(5回)	
	林間学校		
	ボーイスカウト・ガールスカウト活動		
	まちセン合同キャンプ事業		
	チャレンジキャンプ		
	星座教室と野外活動		
	その他 各種体験活動		

発達段階に応じた主な体験活動イメージ			
区分	高校生	中学生	小学生高学年
	生活体験 社会体験	友達体験 交際体験	自然体験 動物体験
			家族行事 家事・手伝い
			その他の体験

# 青少年の社会参加を阻害するものと解決策の方向性 1班

班	問題と原因	分類	理想の姿	解決策の方向性	
1班 (入学前～小学生)	地域の行事が少なくなっている。 近所の人を知らない子が多い。 学校だと挨拶が出来るが、地域に帰るとできない。 子ども会に参加しない。 子ども会の活動に親の理解がない。 子ども同士のコミュニケーションが気軽にとれない。 異年齢の子どもと遊ぶ機会が少ない 多人数で遊ぶことが無い。 空き地など、遊ぶ場所がない。 子ども同士で遊ぶ場がない。 安心して過ごせる場所がない。 休日等、運動場を自由に使えない。 外での遊び方を知らない。 インドア的な遊びに偏っている。 親が多忙で、子どもに目が届かない。 大人からいわれたいことはできるが、自分から工夫して遊ぶことが出来ない。 ゲームのやりすぎ。視力低下。現実とゲームの世界が区別できない。 ゲーム等、楽しむものが身近にあるので、あえて外に目が向かない。 危険察知能力、適応力、ねばり強さが無い。自然体験不足か。 あらゆる体験が不足。 親子ともに外に出ることを嫌う。 家の中で遊んでいると親が安心。 手軽さが好まれる。 楽しみの価値が、個で楽しむ方向 世の中が個人中心に物事を考える傾向にある。 人間関係の煩わしさに背を向ける傾向がある。 人間関係に気を使う。嫌われたら困る。 早寝早起きなど、基本的な生活習慣が身につけていない。 就学前の子どもでも、親と遅くまで起きている。 子育ての情報が行き渡っていない。 子育ての仕方、躾の仕方がわからない。 塾や習い事があるが、時間が合わない。 高学年では、学校の終わる時間が遅い。 一週間の殆どが塾通い。 地域の子どもの自体が少なくなっている。 富士駅周辺など他県、他市からの転入者が多い。 パソコン、ネットで問題が解決する。	問題	一	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 地域の子どもと大人が挨拶をする地域社会</li> <li>■ 同年齢、異年齢の遊び相手がいる地域社会</li> <li>■ 子ども同士で、安全・安心に遊べる場所がある地域社会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶は大人から、挨拶運動の強化。</li> <li>地域の見守りボランティアを増やす。</li> <li>学校教育に地域人材を活用する。</li> <li>多様な機会で、青少年育成団体の魅力を伝え、子どもの加入を増やす。</li> <li>異世代交流事業を創る。</li> <li>楽しくて魅力的で参加したくなるような地域活動にする。</li> <li>地域で遊び場を探し、遊び場を作る。</li> <li>地域の公会堂、公園、学校の活用</li> <li>見守りボランティアを募る(不審者対応)</li> <li>遊び場の情報提供を行う。</li> <li>学校教育に地域人材を活用するなど、大人が子どもに遊びを伝承する。</li> <li>親に、子どもにとって体験活動の魅力と効果を伝える。</li> <li>まちづくりセンター講座に、大人と子どもが触れあえる魅力的な講座を増やす。</li> <li>多少の危険は自己責任で回避するなどの考え方を伝える。</li> <li>市や各種団体がやっている体験活動等の情報提供を行う。</li> <li>大人と子どもが参加しやすい行事を考える。</li> <li>地域行事に企画段階から子どもを参画させて、一緒に作り上げる。</li> <li>子どもの善い行動をほめる。</li> <li>食育を推進する。</li> <li>市のウェブサイトの活用</li> <li>24時間子育て電話相談</li> </ul>
			遊び相手		
			遊び場		
			多様な体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 子どもが外で遊び、多様な体験を得ながら成長する地域社会</li> </ul>	
			個人の意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 人との関わりが大好きな子どもが多くいる地域社会</li> </ul>	
			生活習慣	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 基礎的な生活習慣が身についた子どもが多くいる地域社会</li> </ul>	
			情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 子育ての情報が、手軽に入手できる地域社会</li> </ul>	
			その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>▲ 子ども「学び」、「遊び」を十分に確保できる社会</li> </ul>	



# 青少年の社会参加を阻害するものと解決策の方向性 2班

班	問題と原因	分類	理想の姿	解決策の方向性
2班 (中学生、高校生)	<p>目上の人を敬わない。</p> <p>目上の人との関わり方、接し方が身につけていない。</p> <p>大人と話をしたがらない。</p> <p>小さい頃のことを知っている人と話をすることが恥ずかしい。</p> <p>学習時間を確保し、自分の目標に向かって努力しない。</p> <p>自分の方向が定まらない。</p> <p>人付き合いが煩わしい</p> <p>物事に消極的</p> <p>面倒くさいことを避ける</p> <p>興味の無いことには見向きしない。</p> <p>地域への関心がない。</p> <p>地域イベントに参加して、楽しい体験がない。</p> <p>世間のできごとに関心がない</p> <p>親が地域に関心のため、子どもも幼い頃から地域に無関心。</p> <p>催し、イベントに行くのが嫌いな人がいる。</p> <p>自分の想いはあっても、周りと違うことを表に出さない</p> <p>自分の想いを素直に話せる友人が少ない。</p> <p>仲の良い友達としか交流しない。</p> <p>他人に相談できずに引きこもってしまう高校生</p> <p>周りの目を気にして、目立たないようにする。</p> <p>友人と協力して何かをなすなどの達成感を得る経験がない。</p> <p>高校生などは、学校、家庭、友人向けで、それぞれの顔を持つ</p> <p>地域で、中学生・高校生を知らないために行事参加をお願いできない。</p> <p>地域貢献の気持ちがあっても何をしたら良いかわからないのではないか。</p> <p>興味があっても、行動に移すまでのきっかけがない。</p> <p>意欲ある子どももほど、部活動で忙しい。</p> <p>ITの発達</p> <p>携帯電話のラインなどに夢中になっている高校生</p> <p>ゲームやマンガなど、一人で過ごす時間が楽しい。</p> <p>ゲーム社会で、実体験が少なく、バーチャル体験が多い。</p> <p>催し物とテストが重なっている。</p>	問題	<p>■地域の大人と気軽に話ができる中高生が多い地域社会</p> <p>■自分の目標を定め、努力する中高生が多い地域社会</p>	<p>・声をかける。</p> <p>・住民が参観したくなる学校授業を実施し、授業参観を地域住民に開放する。</p> <p>・異世代交流事業を実施する。</p> <p>・マイスターなど目標に向かって努力している人のキャリア教育授業</p> <p>・民間企業との協働、職場体験</p> <p>・親の職場見学</p> <p>・ふれあい協力員の活用</p>
	<p>個人</p> <p>意識</p> <p>原因</p>	<p>■地域や世間の出来事に関心が高い中高生が多い地域社会</p> <p>■本音話せる友人を持つ中高生が多い地域社会</p>	<p>・地域と学校を結びつける地域コーディネーターの養成</p> <p>・中高生を含めた地域全体で防災教育に取り組む。</p> <p>・学校行事に地域住民を招待</p> <p>・地域で優秀な中高生を称える場を作る。</p> <p>・中高生が気軽に立ち寄れる場を作る。</p> <p>・異世代交流事業の実施</p> <p>・中高生に近い世代の相談相手の養成</p> <p>・同・異世代、スポーツや文化、自然や科学など多様なジャンルの体験交流事業の情報が手軽に手に入る総合情報発信サイトを作る。</p>	
	情報	<p>■地域行事等の情報が参加したい中高生に届き、気軽に中高生を誘える地域社会</p>	<p>・中高生を含めた地域全体で防災教育に取り組む。</p> <p>・地域行事に企画段階から参画させる</p>	
	その他	<p>▲進展するIT環境の中にあっても人とのつながりを大切に思う社会</p>		

# 青少年の社会参加を阻害するものと解決策の方向性 3班

資料4-3

班	問題と原因	分類	理想の姿	解決策の方向性	
3班 (大学生と30代)	地域活動への参加意欲が低い。参加しない。 学校の役員になりたくない。担い手がいらない PTA活動など、学校行事に参加しない。 まちづくりセンターの講座に参加者が少ない。 最近では、ソフトボールなど競技者が減少している。	-	■ 地域や学校の行事・活動等に多くの地域住民が参加する地域社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・団体が多すぎず、ニーズを把握して団体を整理・統合する。</li> <li>・役員の負担が大きい。一人一役</li> <li>・地域活動に楽しさと気軽さを導入する。</li> <li>・まちづくりセンター講座の情報発信を強化する。</li> </ul>	
	知識をもったリーダーが地域にいない。	リーダー	■ 地域にリーダーがいる。リーダーが育つ仕組みがある地域社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域リーダーの人材バンクを作る。</li> <li>・次代のリーダーを育てる意識を持つ。</li> </ul>	
	大学生以上の青年の集まる場所がない。 遊び場が少ない。	居場所	■ 若者が集い、若者同士の絆を感じる場所がある地域社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まちづくりセンターや青少年センターを居場所となるような利用方法に改める。</li> </ul>	
	社会の中で一人で生きていると考えている人が多い。	個人の意識	■ 他人との共生が大切との認識をもち自ら他人に働きかける住民が多くいる地域社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声かけ運動を強化する。</li> </ul>	
	他人のことに興味を示さない。 自分のことだけしか考えない。 近所づきあいをしない。 群れることが苦手。 他人と話すのが苦手と感じている。			<ul style="list-style-type: none"> <li>・まちづくりセンターや青少年センターで、キャリアに役立ったり、出会いを創出したたりするなど、青年が魅力を感じる講座を実施し、仲間づくりを進める。</li> </ul>	
	地域活動、他人に興味が無い。 地域活動にメリットを感じない。 地域活動に参加しないことが、どうして問題となるのかわからない。 地域活動に参加しなくても生活していける。	情報	■ 地域活動の「やりがい」、「楽しさ」を伝えられる仕組みを持つ地域社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災教育をきっかけに地域の絆の大切さを訴える。</li> <li>・子どもの頃から、地域活動の大切さを伝える。</li> </ul>	
	社会参加というものが抽象的でよくわからない 「やりがい」、「楽しさ」を伝えられない。 大変そう、面倒など、悪いイメージがある。 外への関心が低い。			<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域活動に楽しさと気軽さを導入する。</li> <li>・地域活動の大切さ、楽しさを伝えられるように情報を発信する。</li> </ul>	
	市民活動自体を知らない。 市民活動に参加するきっかけがない。 定職者が減っており、生活が不安定で地域への参加の余裕がない。 仕事が少ない。 仕事忙しい。時間が無い。 毎日を生きていくことで精一杯。 携帯電話の時代、会話が無い。 核家族になっっている。 子育てに忙しい。 夫婦一緒に時間が少ない。 独身者が多い。結婚できない。	その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 欲しいときに、欲しい市民活動の情報を得られる地域社会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネット等を利用した、手軽で、分かり易い情報の入手</li> </ul>	
			▲ 良好な雇用環境を確保されている社会	▲ 携帯電話等が普及しても、人の会話が必要との認識を持つ社会	
			▲ 子育てしやすい環境が確保されている社会		

## 【議論経過】

- 平成24年 6月 4日 平成24年度第1回社会教育委員会議
- 委嘱状の交付
  - 今期検討課題について意見交換
    - ・社会教育を取り巻く最近の状況について
  - 今期検討課題決定
    - 検討課題：「青少年の社会参加促進の方策について」
- 平成24年 8月29日 平成24年度第2回社会教育委員会議
- 子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書  
～子どもの頃の体験は、その後の人生に影響する～  
調査機関：独立行政法人国立青少年教育振興機構調査
  - 青少年の発達段階に応じた体験活動
    - ・市主催の体験事業（小学生～高校生）
- 平成24年11月20日 平成24年度第3回社会教育委員会議
- 本市における青少年の社会参加の場とその効果
    - ・「小学校入学前～小学生」、「中学生～高校生」、「大学生～青年」の3班に分かれてGW（グループワーク）を実施
- 【配布資料】
- ・参考資料青少年の体験活動等と自立に関する実態調査
  - ・子ども若者ビジョン
  - ・第41回富士市世論調査「市民活動について」
  - ・富士市は若者にとって魅力あるまちか？
- 平成25年 2月13日 平成24年度第4回社会教育委員会議
- 青少年の社会参加を阻害しているもの
    - 小学校入学前～小学生、中学生～高校生、大学生～青年の3班に分かれてGW
- 平成25年 6月 6日 平成25年度第1回社会教育委員会議
- 青少年の社会参加を阻害している問題と原因
    - 問題を解決した後の理想的な姿についてGW

- 平成25年 8月23日 平成25年度第2回社会教育委員会議  
■青少年の社会参加を促進するための解決策についてGW
- 平成25年11月18日 平成25年度第3回社会教育委員会議  
■青少年の社会参加促進するための具体的方策検討  
■提言書（素案）の検討
- 平成25年12月11日 平成25年度社会教育委員会議臨時会  
■提言書（原案）の作成
- 平成25年12月17日から平成26年 1月14日まで  
■提言書（原案）に関する意見書提出
- 平成26年 2月14日 平成25年度第4回社会教育委員会議  
■提言書（最終案）の検討、承認

## 富士市社会教育委員名簿

(敬称略)

No	氏 名	所 属	役職等	備 考
1	上野 博史	富士市立原田小学校	校長	
2	土屋 和也	富士市立岩松北小学校	校長	
3	杉山 由隆	富士市町内会連合会	会長	
4	涌田 恵美子	常葉大学保育学部	講師	
5	内田 貴子	女性ネットワーク・富士	理事	
6	齋藤 立己	富士市生涯学習推進会連合会	会長	
7	辻村 典枝	富士市文化連盟	副会長	
8	金刺 靖雄	富士市体育協会	顧問	
9	荻野 克雄	富士市子ども会世話人連絡協議会	会長	
10	金刺 哲弥	富士青年会議所青少年こころ育成室	室長 (H24年度)	
11	牧野 保	ボーイスカウト富士地区協議会	副会長	
12	渡井 清視	特定非営利活動法人 ふじ環境倶楽部	代表	
13	矢島 一	富士市立高等学校	教頭	
14	柚木 恵美子	学識経験者	本人	
15	松本 玲子	学識経験者	本人	
16	石岡 かつ子	学識経験者	本人	
17	下川 幸子	学識経験者	本人	

任期:平成24年6月 1日から平成26年5月31日まで

(※No1 上野 博史委員の任期は、平成25年5月20日から平成26年5月31日まで)